

## は し が き

今から30年ほど前に、欧米のヒンディー語研究と教育の実際の一端を現地で見る機会があった。その時、各国のヒンディー語の先生が、初対面の私にいつも決まって同じ質問をしたのがおかしかったのを覚えている。質問は二つで、「なぜヒンディー語を選んだのか」と「ヒンディー語を学んだ学生はどこに就職するのか」だった。

この30年、インドの人口が8億から12億に増えたことは、人口増加率の数学的正確さを裏付けただけであまり驚きは無いが、日本とインドの関係は、量と質ともに、私の予想を大きく超えた変化をとげた。日本からの政府開発援助を受けた首都デリーと近郊を結ぶ総延長約200kmの地下鉄デリー・メトロは現在も拡張中で、5年後には総延長が約2倍になりロンドンの地下鉄を超えるらしい。さらに日本の新幹線がインドに輸出されようとする時代、インド・ビジネスマンの子弟用にインド人学校が東京などに開校される時代となり、旅行や仕事のためにヒンディー語を学ぶ日本人も増えてきた。私のところにも、インドで働く日本人用のヒンディー語検定問題作成の依頼が日本の会社から来るほどだ。かつて質問された「学生の就職」に関しては、当時と今では大分答え方が違ってくるはずだ。

もう一つの質問「なぜヒンディー語」の答えは、恥ずかしいことに未だによくわからない。当時は苦しまぎれに、「あなたと同じです」と答えた。どの先生も、苦笑して、それ以上このことは質問しなかったのも共通していた。ただ、高校卒業後に「なんとなく選んでしまった」ヒンディー語の教室で、初めて文字と発音に接した時の新鮮な驚きは今もよく覚えている。私は、東京外国語大学、インドのアラーハーバード大学で教育を受けることができた。両大学に関わる多くの先生方の学恩、また友人たちから受けた有形・無形の恩恵は忘れることができない。また、東京外国語大学に勤務してからは、最初の所属である外国語学部(現在、言語文化学部)、次に所属したアジア・アフリカ言語文化研究所の同僚の方たちからは、とうてい数え上げることのできないほどの知識や便宜を享受することができた。本来であれば、それぞれお名前をお出ししてここに謝意を表すべきではあるが、ここでは、一番最初にヒンディー語の手ほどきをしてくださり後の私の進路を決定づけた三人の恩師、土井久弥先生、田中敏雄先生、ラクシュミーダル・マーラヴィーヤ先生のお名前を出すだけで許していただきたい。

この辞典がこのような形で出版できたのは、アジア・アフリカ言語文化研究所、特に、情報資源利用研究センターと文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成(GICAS)」の成果の一端である、電子出版技術の開発と南アジア諸言語のテキストコーパスの構築に負っている。また辞典出版企画には、最初から三省堂辞書出版部に加わっていただいた。ヒンディー語をはじめ、日本ではあまりなじみのない南アジア諸言語の辞典出版を引き受けるという決断をしていただいたことには、いくら感謝してもしきれない気持ちである。昨年度の「シンハラ語」「パンジャービー語」につづいて、今年「カナダ語」とこの「ヒンディー語」が、無事、出版にこぎつけることができ、ここに4冊の南アジア諸言語の辞典が誕生した。

編集の最終段階で様々な点検の労を取っていただいた川路さつき氏、三省堂辞書出版部の皆さま、とりわけ企画の始まりから出版に至るまでの一部始終を温かく見守り、時には叱咤激励してくれた柳百合氏には心からの感謝を捧げたい。

2016年6月23日

町田和彦

## この辞典の使い方

本辞典は、「ヒンディー語・日本語辞典」と「日本語・ヒンディー語小辞典」で構成されている。ここでは「ヒンディー語・日本語辞典」の使い方を説明する。「日本語・ヒンディー語小辞典」については、p.916を参照されたい。

説明の中で人名の直後に(出版年)がある場合は、この説明の末尾に挙げてある参考文献を指す(p.xvi [参考にした辞書・文法書]を参照)。本辞典で使用されている文法用語は、町田(2008)に準拠する。各見出し語ごとの内容は、基本的に以下の順序で説明されている。

1. 見出し語
2. 発音
3. つづりの交替形と変異形
4. 語源
5. 品詞
6. 分野
7. 語義
8. 類義語, 反意語
9. 用例

### 1. 見出し語

見出し語のヒンディー語は、やや大きめの標準書体のデーヴァナーガリー文字で示した。ヒンディー語辞書の慣例に従い、語形変化をする見出し語は、名詞と形容詞は主格・単数形、動詞は不定詞の形を示した。固有名詞などの例外は除き、見出し語には原則として単独形を採用し、2語以上から成る語句はなるべく避けた。見出し語にはならない2語以上から成る重要な語句は、特定の見出し語の用例として収録した。

ヒンディー語の合成語(たとえば **AB**)は、間にスペースを入れた2語の形式 **A B** で表記されたり、ハイフンを使った語形 **A-B** で表記されることもあり、必ずしも形が統一されていない。本辞典の合成語の形は、すでに出版された各種辞書や現代の実際の用例を考慮して、最終的には編著者が決めた。なお、見出し語形の「ゆれ」については、後述する「3. つづりの交替形と変異形」を参照。

### 2. 発音

各見出し語の直後に、/ /で以下の2種の発音を併記した。

- 1) 転写記号による発音表記(ラテン文字表記)
- 2) カタカナによる発音表記(カナ発音)

デーヴァナーガリー文字の基本音節文字とその発音(転写記号とカナ発音)の一覧表は、以下の通りである。

## a) 母音

母音字	अ	आ	इ	ई	उ	ऊ	ऋ	ए	ऐ	ओ	औ
母音記号	◌	◌ā	◌i	◌ī	◌u	◌ū	◌ṛ	◌e	◌ai	◌o	◌au
	ア	アー	イ	イー	ウ	ウー	リ	エー	アエー	オー	アオー

## b) 子音

軟口蓋破裂音 無声・無気	क	का	कि	की	कु	कू	कृ	के	कै	को	कौ
	ka	kā	ki	kī	ku	kū	kṛ	ke	kai	ko	kau
	カ	カー	キ	キー	ク	クー	クリ	ケー	カエー	コー	カオー
軟口蓋破裂音 無声・有気	ख	खा	खि	खी	खु	खू	खृ	खे	खै	खो	खौ
	kʰa	kʰā	kʰi	kʰī	kʰu	kʰū	kʰṛ	kʰe	kʰai	kʰo	kʰau
	カ	カー	キ	キー	ク	クー	クリ	ケー	カエー	コー	カオー
軟口蓋破裂音 有声・無気	ग	गा	गि	गी	गु	गू	गृ	गे	गै	गो	गौ
	ga	gā	gi	gī	gu	gū	gṛ	ge	gai	go	gau
	ガ	ガー	ギ	ギー	グ	グー	グリ	ゲー	ガエー	ゴー	ガオー
軟口蓋破裂音 有声・有気	घ	घा	घि	घी	घु	घू	घृ	घे	घै	घो	घौ
	gʰa	gʰā	gʰi	gʰī	gʰu	gʰū	gʰṛ	gʰe	gʰai	gʰo	gʰau
	ガ	ガー	ギ	ギー	グ	グー	グリ	ゲー	ガエー	ゴー	ガオー
鼻子音	ङ	ङा	ङि	ङी	ङु	ङू	ङृ	ङे	ङै	ङो	ङौ
	ṅa	ṅā	ṅi	ṅī	ṅu	ṅū	ṅṛ	ṅe	ṅai	ṅo	ṅau
	ナ	ナー	ニ	ニー	ヌ	ヌー	ヌリ	ネー	ナエー	ノー	ナオー

硬口蓋破裂音 無声・無気	च	चा	चि	ची	चु	चू	चृ	चे	चै	चो	चौ
	ca	cā	ci	cī	cu	cū	cṛ	ce	cai	co	cau
	チャ	チャー	チ	チー	チュ	チュー	チュリ	チェー	チャエー	チョー	チャオー
硬口蓋破裂音 無声・有気	छ	छा	छि	छी	छु	छू	छृ	छे	छै	छो	छौ
	chʰa	chʰā	chʰi	chʰī	chʰu	chʰū	chʰṛ	chʰe	chʰai	chʰo	chʰau
	チャ	チャー	チ	チー	チュ	チュー	チュリ	チェー	チャエー	チョー	チャオー
硬口蓋破裂音 有声・無気	ज	जा	जि	जी	जु	जू	जृ	जे	जै	जो	जौ
	ja	jā	ji	jī	ju	jū	jṛ	je	jai	jo	jau
	ジャ	ジャー	ジ	ジー	ジュ	ジュー	ジュリ	ジェー	ジャエー	ジョー	ジャオー
硬口蓋破裂音 有声・有気	झ	झा	झि	झी	झु	झू	झृ	झे	झै	झो	झौ
	jʰa	jʰā	jʰi	jʰī	jʰu	jʰū	jʰṛ	jʰe	jʰai	jʰo	jʰau
	ジャ	ジャー	ジ	ジー	ジュ	ジュー	ジュリ	ジェー	ジャエー	ジョー	ジャオー

	ञ	जा	ञि	ओ	ञु	ञू	ञृ	ञे	ञै	ओ	औ
鼻子音	ña	ñā	ñi	ñī	ñu	ñū	ñṛ	ñe	ñai	ño	ñau
	ナ	ナー	ニ	ニー	ヌ	ヌー	ヌリ	ネー	ナエー	ノ	ナオー

そり舌破裂音	ट	टा	टि	टौ	टु	टू	टे	टै	टो	टौ	
無声・無気	ṭa	ṭā	ṭi	ṭī	ṭu	ṭū	ṭe	ṭai	ṭo	ṭau	
	タ	ター	ティ	ティー	トゥ	トゥー	テー	タエー	ト	タオー	
そり舌破裂音	ठ	ठा	ठि	ठौ	ठु	ठू	ठे	ठै	ठो	ठौ	
無声・有気	ṭʰa	ṭʰā	ṭʰi	ṭʰī	ṭʰu	ṭʰū	ṭʰe	ṭʰai	ṭʰo	ṭʰau	
	タ	ター	ティ	ティー	トゥ	トゥー	テー	タエー	ト	タオー	
そり舌破裂音	ड	डा	डि	डौ	डु	डू	डे	डै	डो	डौ	
有声・無気	ḍa	ḍā	ḍi	ḍī	ḍu	ḍū	ḍe	ḍai	ḍo	ḍau	
	ダ	ダー	ディ	ディー	ドゥ	ドゥー	デー	ダエー	ド	ダオー	
そり舌破裂音	ढ	ढा	ढि	ढौ	ढु	ढू	ढे	ढै	ढो	ढौ	
有声・有気	ḍʰa	ḍʰā	ḍʰi	ḍʰī	ḍʰu	ḍʰū	ḍʰe	ḍʰai	ḍʰo	ḍʰau	
	ダ	ダー	ディ	ディー	ドゥ	ドゥー	デー	ダエー	ド	ダオー	
鼻子音	ण	णा	णि	णौ	णु	णू	णृ	णे	णै	णो	णौ
	ṇa	ṇā	ṇi	ṇī	ṇu	ṇū	ṇṛ	ṇe	ṇai	ṇo	ṇau
	ナ	ナー	ニ	ニー	ヌ	ヌー	ヌリ	ネー	ナエー	ノ	ナオー

齒裏破裂音	त	ता	ति	तौ	तु	तू	तृ	ते	तै	तो	तौ
無声・無気	ta	tā	ti	tī	tu	tū	tr	te	tai	to	tau
	タ	ター	ティ	ティー	トゥ	トゥー	トリ	テー	タエー	ト	タオー
齒裏破裂音	थ	था	थि	थौ	थु	थू	थृ	थे	थै	थो	थौ
無声・有気	tʰa	tʰā	tʰi	tʰī	tʰu	tʰū	tʰṛ	tʰe	tʰai	tʰo	tʰau
	タ	ター	ティ	ティー	トゥ	トゥー	トリ	テー	タエー	ト	タオー
齒裏破裂音	द	दा	दि	दौ	दु	दू	दृ	दे	दै	दो	दौ
有声・無気	da	dā	di	dī	du	dū	dr	de	dai	do	dau
	ダ	ダー	ディ	ディー	ドゥ	ドゥー	ドリ	デー	ダエー	ド	ダオー
齒裏破裂音	ध	धा	धि	धौ	धु	धू	धृ	धे	धै	धो	धौ
有声・有気	dʰa	dʰā	dʰi	dʰī	dʰu	dʰū	dʰṛ	dʰe	dʰai	dʰo	dʰau
	ダ	ダー	ディ	ディー	ドゥ	ドゥー	ドリ	デー	ダエー	ド	ダオー
鼻子音	न	ना	नि	नौ	नु	नू	नृ	ने	नै	नो	नौ
	na	nā	ni	nī	nu	nū	nr	ne	nai	no	nau
	ナ	ナー	ニ	ニー	ヌ	ヌー	ヌリ	ネー	ナエー	ノ	ナオー

両唇破裂音	प	पा	पि	पी	पु	पू	पृ	पे	पै	पो	पौ
無声・無気	pa	pā	pi	pī	pu	pū	pr̥	pe	pai	po	pau
	パ	パー	ピ	ピー	プ	プー	プリ	ペー	パエー	ポー	パオー
両唇破裂音	फ	फा	फि	फी	फु	फू	फृ	फे	फै	फो	फौ
無声・有気	p <sup>h</sup> a	p <sup>h</sup> ā	p <sup>h</sup> i	p <sup>h</sup> ī	p <sup>h</sup> u	p <sup>h</sup> ū	p <sup>h</sup> r̥	p <sup>h</sup> e	p <sup>h</sup> ai	p <sup>h</sup> o	p <sup>h</sup> au
	パ	パー	ピ	ピー	プ	プー	プリ	ペー	パエー	ポー	パオー
両唇破裂音	ब	बा	बि	बी	बु	बू	बृ	बे	बै	बो	बौ
有声・無気	ba	bā	bi	bī	bu	bū	br̥	be	bai	bo	bau
	バ	バー	ビ	ビー	ブ	ブー	ブリ	ベー	バエー	ボー	バオー
両唇破裂音	भ	भा	भि	भी	भु	भू	भृ	भे	भै	भो	भौ
有声・有気	b <sup>h</sup> a	b <sup>h</sup> ā	b <sup>h</sup> i	b <sup>h</sup> ī	b <sup>h</sup> u	b <sup>h</sup> ū	b <sup>h</sup> r̥	b <sup>h</sup> e	b <sup>h</sup> ai	b <sup>h</sup> o	b <sup>h</sup> au
	バ	バー	ビ	ビー	ブ	ブー	ブリ	ベー	バエー	ボー	バオー
鼻子音	म	मा	मि	मी	मु	मू	मृ	मे	मै	मो	मौ
	ma	mā	mi	mī	mu	mū	mṛ	me	mai	mo	mau
	マ	マー	ミ	ミー	ム	ムー	ムリ	メー	マエー	モー	マオー

半母音	य	या	यि	यी	यु	यू	यृ	ये	यै	यो	यौ
y	ya	yā	yi	yī	yu	yū	yr̥	ye	yai	yo	yau
	ヤ	ヤー	イ	イー	ユ	ユー	ユリ	エー	ヤエー	ヨー	ヤオー
半母音	र	रा	रि	री	रु	रू		रे	रै	रो	रौ
r	ra	rā	ri	rī	ru	rū		re	rai	ro	rau
	ラ	ラー	リ	リー	ル	ルー		レー	ラエー	ロー	ラオー
半母音	ल	ला	लि	ली	लु	लू	लृ	ले	लै	लो	लौ
l	la	lā	li	lī	lu	lū	lr̥	le	lai	lo	lau
	ラ	ラー	リ	リー	ル	ルー		レー	ラエー	ロー	ラオー
半母音	व	वा	वि	वी	वु	वू	वृ	वे	वै	वो	वौ
v	va	vā	vi	vī	vu	vū	vr̥	ve	vai	vo	vau
	ワ	ワー	ヴィ	ヴィー	ヴ	ヴー	ヴリ	ヴェー	ワエー	ヴォー	ワオー

齒擦音	श	शा	शि	शी	शु	शू	शृ	शे	शै	शो	शौ
無声	śa	śā	śi	śī	śu	śū	śr̥	śe	śai	śo	śau
	シャ	シャー	シ	シー	シュ	シュー	シュリ	シェー	シャエー	ショー	シャオー
齒擦音	ष	षा	षि	षी	षु	षू	षृ	षे	षै	षो	षौ
無声	ṣa	ṣā	ṣi	ṣī	ṣu	ṣū	ṣr̥	ṣe	ṣai	ṣo	ṣau
	シャ	シャー	シ	シー	シュ	シュー	シュリ	シェー	シャエー	ショー	シャオー

歯擦音	स	सा	सि	सो	सु	सू	सृ	से	सै	सो	सौ
無声	sa	sā	si	sī	su	sū	sr̥	se	sai	so	sau
	サ	サー	スイ	スイー	ス	スー	スリ	セー	サエー	ソー	サオー

声門摩擦音	ह	हा	हि	हो	हु	हू	हृ	हे	है	हो	हौ
無声	ha	hā	hi	hī	hu	hū	hr̥	he	hai	ho	hau
	ハ	ハー	ヒ	ヒー	フ	フー	フリ	ヘー	ハエー	ホー	ハオー

転写記号は、ラテン文字をベースにした、伝統的な表記法にほぼ従った。ただし、以下の2点は、本辞典で採用した独自の転写記号である。

	例	本辞典の表記	伝統的な表記
1) 有気音	ख, घ など	k <sup>h</sup> , g <sup>h</sup> など	kh, gh など
2) 語中・語末の母音 a	तसवीर	tasāvīrā	tasvīr

有気音は無気音を表すラテン文字の右肩に小さな <sup>h</sup> を添えて区別した。これにより、たとえ子音 **k** と子音 **h** の連続 **kh** との混同を避けることができる。

ヒンディー語におけるつづりと発音の「ずれ」のほとんどは、子音字に含まれている母音 **a** が語中の位置によっては消えてしまうことによって生じる。たとえば、子音字 **क** *ka* が語中の特定の位置や語末にくると、子音字に本来含まれている母音 **a** が消えて、子音 **k** のみの発音になる。どういう条件で **a** が消えてしまうかという、いわゆる「シュワー削除規則」の説明は、入門書や文法書にゆずることとする。従来の辞書は、発音を併記していても、この消えた母音を特には明示していない。本辞典では、この消えた母音を **ā** と明示し、つづりととの整合性をもたせた。この表記は、ヒンディー語のつづりと発音との対応にまだ慣れていない初心者はもちろんのこと、デーヴァナーガリー文字で書かれたサンスクリット語（書かれた通りに発音する）の知識がある人にも役立つはずである。

カナ発音は、本質的に外国語発音表記としての限界はあるが、声に出して発音してみるとりあえずの目安としては有効である。カナ発音は転写記号を忠実にうつすというよりは、日本語の音連続としてより自然な形を重視したもので、やや割り切った表記になっている箇所もある。

なお、本辞典では、伝統的なデーヴァナーガリー文字に加えて、以下の7種の文字も示した。これは、インド語派内で歴史的に発達した音や外来音を表すため、対応する子音字の下部にヌクターという点 ◌ を付加したものである。実際には、外来音のほとんどは、表記上ヌクターを無視してもよい。ただ、जमाना /zamānā/ 「時代」と जमाना /jamānā/ 「集める」のように、ヌクターの有無でのみ語を区別できることもあるので、本辞典ではなるべく厳密に区別した。

#### 文字 発音表記

क	+	◌	क	qa	カ	無声口蓋垂破裂音。ペルシャ文字の ق に対応。
ख	+	◌	ख	xa	カ	無声軟口蓋摩擦音。ペルシャ文字の خ に対応。
ग	+	◌	ग	ḡa	ガ	有声軟口蓋摩擦音。ペルシャ文字の غ に対応。

ज	+	◌	ज़	za	ザ	有声歯茎摩擦音. ペルシャ文字の $\text{ذ ز ژ ض ظ}$ に対応.
ड	+	◌	ड़	ṛa	ラ	有声・無気そり舌弾き音. 母音間のそり舌破裂音 $\text{ड ḍa}$ が歴史的に変化した音.
ढ	+	◌	ढ़	ṛ̥ha	ラ	有声・有気そり舌弾き音. 母音間のそり舌破裂音 $\text{ढ ḍ̥ha}$ が歴史的に変化した音.
फ	+	◌	फ़	fa	ファ	無声唇歯摩擦音. ペルシャ文字の $\text{ف}$ に対応.

### 3. つづりの交替形と変異形

南アジアの現代諸語に共通する問題のひとつに、語のつづりの不統一がある。ヒンディー語の場合、同じ系統のインド・ヨーロッパ語族インド語派の古い時代に遡ることができる語にも、借用語の一部にも、つづりの不統一がある。この不統一は、歴史的な音韻変化の「ゆれ」や、広大な地域で使用される個人差・地域差の「ゆれ」を反映している。そのため、科学的観点からも教育的観点からも、この問題に関係している公的機関は、唯一の規範形を決定することに今日までためらいを見せてきた。言語学的・社会的・政治的に見て、唯一の規範形的前提となる原理そのものの決定が困難なのが明らかだからである。一方、辞書ですべての「ゆれ」語形に同じ説明を加えることは非現実的であるし、かといって編著者が一方的に特定の語形を切り捨てるわけにもいかない。

本辞典では、意味も語源もまったく同じ条件で、語形にのみ「ゆれ」がある場合、「交替形」と「変異形」というカテゴリーを立てて説明した。語形に「ゆれ」があっても、発音が同じであるものを交替形とし、発音も若干異なるものを変異形とした。語源・語義・用例などの実際の説明は、編著者が選んだ代表となる見出し語形のもとで行った。したがって、見出し語としては交替形および変異形も示し、説明のある代表的な見出し語形を☞(類義語参照記号)で示した。

以下に、ペルシャ語から借用された **मरहम** *marāhamā* 「軟膏」に対応する交替形と変異形の例を挙げる。交替形は、語中の発音されないシュワー **ā** を含む **-raha-** を子音連続 **-rha-** を表す結合文字に変更したつづりである。変異形は、語中の子音 **-r-** が **-l-** に変化したつづりである。

記号	例	発音	分類
▷	मर्हम	marhamā (< marāhamā)	交替形(発音は変わらない)
▶	मलहम	malāhamā	変異形(発音は一部変わる)

サンスクリット語からの借用語の中には、本来、語末が純粹に子音で終わるものがある。この場合、語末の子音字にいわゆるヴィラーマ記号 ◌् を付けて子音で終わることを明示することが正しいとされる。しかし、ヒンディー語ではもともと語末の子音字に含まれるシュワーは消えるため、あえてヴィラーマ記号を付けない「俗の」つづりがよく使われる。これも一種の交替形と言える。次の例は、サンスクリット語からの借用語「学者」における2種類のつづりを示したものである。

例	発音	
विद्वान्	vidvān	本来のサンスクリット語形
विद्वान	vidvāṅ	その交替形(発音は変わらない)



このように、語末の子音字に付加されるヴィラーマ記号の有無だけがつづりの違いになっている場合、本来のサンスクリット語形とその交替形は、配列上、隣り合う見出し語となる。本辞典では、煩を避けるために、見出し語には本来のヴィラーマ記号付きの本来のつづりのみを出し、交替形の存在 (▷ विद्वान など) を示すにとどめた。

英語からの借用語の表記において、本来の語彙に含まれる英語固有の母音 [ɔ] や [ɑ] をあえて表示するために、実際に発音するかどうかは別にして、母音 ā を表す母音字 आ や母音記号 ा̄ にチャンドラ記号 ̣ を付加した表記をする場合がある。これは、一種の変異形と言える。次の例は、英語からの借用語「医者」のつづりの変異形である。

例	発音	
डाक्टर	ḍāktara	チャンドラ記号を使わないつづり
डॉक्टर	(? ḍāktara)	チャンドラ記号を使ったつづり、一種の変異形

本辞典では、チャンドラ記号を含むつづりは見出し語に採用せず、変異形の存在 (▷ डॉक्टर など) を示すにとどめた。

#### 4. 語源

語源情報を、[ ]の中に掲載した。

現代ヒンディー語には、過去から継承してきた語彙以外に、現代までに接触したさまざまな言語から取り入れた語彙が同居している。さらに、それらの要素を組み合わせて新語を作る、旺盛な造語活動も同時に進行してきた。異なる語源の要素が組み合わさる語形成とは別に、すべての要素がサンスクリット語であるにもかかわらずサンスクリット語の辞書には存在しない「ネオ・サンスクリット語」や、すべての要素がペルシャ語であるにもかかわらずヒンディー語を含む南アジアでしか使われない「ネオ・ペルシャ語」なども少なくない。この結果として、ヒンディー語は出自の異なる多くの類義語を抱えることになった。ヒンディー語のこうした「豊かな語彙」は、陰影に富む表現を可能にしている一方、学習者にとっては、語義だけでは類義語の奥行きや輪郭の違いを把握することが困難な場合が多い。本辞典で示した「どの言語から」「どのように(変化, 借用, 造語など)」などを表すやや詳しい語源情報は、語義だけでは説明しにくい語彙の背後にある、文化的・宗教的コンテキストを示唆するために材料を提供することを目的としている。

語形の表示は、参照した辞典の見出し語形をなるべく忠実に再現した。これは、学習者や研究者が、該当する辞書を更に調べる際の便宜を考慮したためである。

古期インド語派の語形は、Turner (1962-1966) を参照した。その語形は、ラテン文字をベースにした伝統的な転写記号の斜体で表示した。また、参照の便のため表示した語形には、T.09331 などの形式で、Turner (1962-1966) が採用している語彙整理番号を付した。

以下、それぞれの語彙の示し方について説明する。

サンスクリット語は、Monier-Williams (1899) を参照した。語形は、デーヴァナーガリー文字の斜体で示した。なお、語中に連声(れんじょう)を含んでいる場合は、煩瑣にならない程度に、形態素の連続をハイフンを使って復元した。

ペルシャ語は、古典的なペルシャ語辞書である Steingass (1892) を参照した。本辞典では、アラビア語やトルコ語から直接借用された語彙は採用していない。ただし、アラビア語起源、トルコ語起源の語彙であっても Steingass に収録されていれば、ペルシャ語経由で南アジアに借



用されたものと見なした。また、アラビア起源の語をペルシャ語が借用し、それが更にペルシャ語内部で派生して生じた語形が借用された場合は、ペルシャ語と見なした。なお、語源情報で示したペルシャ文字による語形は上記の辞書の見出し語形であり、ウルドゥー語で使われている語形とは必ずしも一致しないことをお断りしておく。ペルシャ文字による語形を採用したことで、上記辞書に直接アクセスできるだけでなく、借用当時と現代のペルシャ語の発音の違いに関する考証を省略することができた。ヒンディー語に含まれるペルシャ語からの借用語の発音は、現代ではなく古典期のものが多いと言われているからである。

一部補助的に利用したドラヴィダ諸語関係の語源情報は、改訂版である **Burrow and Emeneau (1984)** を参照した。この辞書は、語彙整理番号が改訂前と改訂後では異なるので、本辞典で参照した語源には、**DEDr.0360 (DED.0302)** のように、( )内に改訂前の番号を示した。

語源情報に載せた語形の英訳(‘ ’で示した)は、本辞典の編著者が参考にした英語を参考に改変・省略したものである。以下に、語源情報で使用された記号類とその具体例を挙げる。

表記	意味	見出し語	語源情報欄
< A	A から変化した	भारत	[<OIA.m. <i>bhaktá-</i> ‘food’: T.09331] 古期インド語派に遡る語形。T.09331 は Turner (1962-1966) の語彙整理番号。
		सूरज-	[<Skt.m. <i>सूर्य-</i> ‘the sun or its deity’] 約 15, 16 世紀頃を中心に、バクティ運動の高まりと前後して民衆の言語に借用されたサンスクリット語彙が、それ以降の歴史的音韻変化を受けた語彙。
←A	A から借用した	पुस्तक	[←Skt.m. <i>पुस्तक-</i> ‘a manuscript, book’] サンスクリット語からの借用は、借用が比較的新しく、語形が変化を受けていない語に限った。
		अजीब	[←Pers.adj. <i>عجيب</i> ‘wonderful, strange’ ←Arab.] ペルシャ語経由のアラビア語からの借用。
		चाबी	[←Port.f. <i>chave</i> ‘key’] ポルトガル語からの借用。
A + B	A と B が合成した	अक्लदाढ़	[ <i>अक्ल</i> + <i>दाढ़</i> ] 異なる言語の要素の合成語「親知らず, 知恵歯」。A と B がペルシャ語の場合のネオ・ペルシャ語も、このカテゴリーに分類した。
hypercorr.	過剰修正	नर्क	[hypercorr.Skt.m. <i>नर्क-</i> for Skt.m. <i>नरक-</i> ‘hell, place of torment’] たとえば、本来正しいサンスクリット語つづりを、類推による誤解で誤用と判断して、却って正しくない語形に変えたもの。

metathesis	音位転換	उलथना	[metathesis; cf. उलथना] たとえば、語を構成する音素(あるいは音節)の並び順が入れ替わって使用される語形.
neo.Skt.	ネオ・サンスクリット語	वेतनभोगी	[neo.Skt.m. वेतन-भोगिन्- 'one who is salaried'] サンスクリット語要素で造語された「サラリーマン」. A + B の特別な場合として別カテゴリーにした.
pseudo.Skt.	疑似サンスクリット	नगण्य	[pseudo.Skt. न-गण्य- 'negligible'] 一見ネオ・サンスクリット語に見えるが、サンスクリット語造語法に正しく合致していない合成語.
echo-word	エコー・ワード	सचमुच	[echo-word; cf. सच] 語の前半の要素に音を似せた特に意味のない要素を繰り返す、南アジアに多い造語法.
A × B	A と B が混成した	अगस्त	[Port.m. Agosto 'August' × Eng.n. August] ポルトガル語と英語との混成.
cog. A	A と同起源である	सफ़ेद	[←Pers.adj. سفید 'white, fair'; cog. Skt. श्वेत- 'white, bright'] ペルシャ語から借用された語が、サンスクリット語から借用された語と同起源のインド・イラン語派に遡ることを示す.
caus.	動詞の使役形	मिलवाना	[caus. of मिलना, मिलाना] 使役形「混ざらせる」が、自動詞「混ざる」と他動詞「混ぜる」の派生形であることを示す.
onom.	擬音語	रिमझिम	[onom.] 女性名詞「しとしと降る小雨」が、雨音の擬音から派生していることを示す.
cf. A	A を参照	समझ	[cf. समझना] 女性名詞「理解」が、動詞「理解する」から派生していることを示す.
*A	A は仮説上の語形	सटकना	[< OIA. *satt- <sup>2</sup> 'slip away': T.13100] 古期インド語派の仮説上の語形. 意味・語形とともに、この語形から出発すると説明しやすい.
?A	A は疑わしい		[?neo.Skt.n. सं-तुलन- 'balance, equilibrium'] ネオ・サンスクリット語であることが疑わしいことを示す.

語源情報で使用した言語名は、以下の通りである(アルファベット順)。

Arab.	アラビア語	MIA.	中期インド語派
Beng.	ベンガル語	neo.Skt.	ネオ・サンスクリット語
Chin.	中国語	Nepal.	ネパール語
Drav.	ドラヴィダ諸語	NIA.	新インド語派
Eng.	英語	OIA.	古期インド語派
Fr.	フランス語	Panj.	パンジャービー語
I.Eng.	インド英語	Pers.	ペルシャ語
Japan.	日本語	Port.	ポルトガル語
Gr.	ギリシャ語	Skt.	サンスクリット語
Guj.	グジャラーティー語	Tib.	チベット語
Lat.	ラテン語	Turk.	トルコ語
Mar.	マラーティー語		

## 5. 品 詞

見出し語の品詞名は、英語の短縮表記を斜体で示した(たとえば、男性名詞 **masculine** は *m.*)。見出し語の品詞名と語源情報で使用されている品詞名はかなり重複するので、以下にまとめて対照リストを示す。— は、使われていないことを示す。語源情報で示した品詞名は、その言語の文法特性や品詞表示の独自性のため、見出し語の品詞名とは完全には一致しない場合もある。語源情報で品詞を明示するときは、上で見たように言語名と一体化させて<言語名.品詞.>の形で立体で示した(たとえば、サンスクリット語の男性名詞は **Skt.m.**)。

	見出し語	語源情報	注
形容詞	<i>adj.</i>	adj.	
副詞	<i>adv.</i>	adv.	
不変化詞	<i>ind.</i>	ind.	
名詞	<i>m.</i>	m.	男性名詞
	<i>f.</i>	f.	女性名詞
	—	n.	サンスクリット語、マラーティー語の場合は中性名詞 ( <b>neuter</b> )。文法性の区別のない英語、ペルシャ語などでは名詞 ( <b>noun</b> ) を表す。
代名詞	<i>pron.</i>	pron.	
動詞	<i>vi.</i>	vi.	自動詞。
	<i>vt.</i>	vt.	他動詞。
数詞	<i>num.</i>	—	ヒンディー語の基数詞にのみ使用。序数詞は形容詞として扱った。

接続詞	<i>conj.</i>	conj.	
間投詞	<i>int.</i>	int.	
後置詞	<i>postp.</i>	—	ヒンディー語にのみ使用.
前置詞	—	prep.	英語などにのみ使用.
接頭辞	<i>pref.</i>	pref.	
接尾辞	<i>suf.</i>	suf.	
連結形	<i>comb. form</i>	—	ヒンディー語にのみ使用

なお、品詞が動詞の場合は、( )の中に完了分詞・男性・単数の語形を発音とともに示した。

## 6. 分野

### 1) 専門分野に関するもの(五十音順)

【医学】	【食物】
【イスラム教】	【神話】
【演劇】	【スィック教】
【音楽】	【数学】
【貝】	【スポーツ】
【化学】	【生物】
【楽器】	【単位】
【キリスト教】	【地名】
【鉱物】	【地理】
【国名】	【動物】
【経済】	【天文】
【ゲーム】	【鳥】
【言語】	【ヒンドゥー教】
【暦】	【仏教】
【昆虫】	【物理】
【コンピュータ】	【文学】
【魚】	【法律】
【植物】	【歴史】
【ジャイナ教】	【ユダヤ教】

## 2) 語法に関するもの(五十音順)

〔慣用〕	〔皮肉〕
〔擬音〕	〔俗語〕
〔擬声〕	〔卑語〕
〔敬語〕	〔幼児語〕
〔古語〕	〔略語〕
〔諺〕	

## 3) 文法に関するもの(五十音順)

〔継続表現〕	〔進行表現〕
〔受動態〕	〔複合動詞〕

## 7. 語義

語義は、必要に応じて番号を付けて分類した。語義そのものではない説明は、《 》の中に示した。ヒンドゥー教や神話に関係したサンスクリット語からの借用語は、定まった日本語訳がない場合、サンスクリット語読みを語義として与え、《 》内で簡単に説明した。たとえば、ヴィシュヌ神の化身の一つ **राम** は、語義ではヒンディー語発音「ラーム」ではなく、サンスクリット語読み「ラーマ」を優先させた。

語義が別の見出し語で解説されている場合は、☞ で参照先を示した。

## 8. 類義語, 反意語

語義の直後に、必要に応じて類義語と反意語を以下のように示した。

(⇒ 類義語)

(⇔ 反意語)

この表示は網羅的なものではなく、語源の異なる類義語などを主に示した。なお、類義語には、3. に挙げたつづりの交替形や変異形は含めていない。

また、自然性(男と女, 雄と雌)を区別する人間・動物を表す名詞に関しては、反意語として対応する名詞を示した。たとえば、「父方の祖父」に対する「父方の祖母」、「雄イヌ」に対する「雌イヌ」など。

## 9. 用例

用例は□で示した。～は見出し語に相当する。例文は、主にプレームチャンド (प्रेमचंद, 1880-1936) の長編小説・短編小説から採取したが、インド独立後のヒンディー語作家の作品やインターネット上に掲載されている記事なども参考にした。プレームチャンドの作品には、作品のテーマや当時の社会背景を反映して、差別表現などの観点からそのままでは不适当と思われる用例もあり、それらは用例としての採用を見送った。ただし、適切な用例が他にないために、採用を優先した箇所が若干あることもあらかじめお断りしておく。

用例は、原文を必要に応じて一部加工したことがある。たとえば、人名などの固有名詞を代

名詞に置き換えた箇所がある。また、原文では三人称代名詞主格の単数形 वह 「彼、彼女」が、敬意を表す三人称「あの方」の意としても使われていることが多くあったが、この場合は、教科書的な規範では、複数形 वे の使用が望ましい。しかし、この用例が、ウルドゥー語は無論のこと、ヒンディー語の現実の用法でも支持されていることを考慮し、また原文を尊重して、そのままにした場合もある。

### [参考にした辞書・文法書]

参考にした辞書・文法書は多数あるが、「この辞典の使い方」で言及されたものを中心に、以下のものを挙げておく。

#### 1) ヒンディー語、ウルドゥー語(ヒンドウスターニー語)

古賀勝郎・高橋明(編), 『ヒンディー語=日本語辞典』, 大修館書店, 2006.

土井久弥(編), 『ヒンディー語小辞典』, 大学書林, 1975.

町田和彦, 『ニューエクスプレス ヒンディー語』, 白水社, 2008.

McGregor, R. S. (Ronald Stuart), *The Oxford Hindi-English Dictionary*, London: Oxford University Press, 1993.

Platts, John T. (John Thompson), *A Dictionary of Urdu, Classical Hindi, and English*. London: W. H. Allen & Co., 1884.

Sharma, Ayendra and Hans J. Vermeer, *Hindi-Deutsches Wörterbuch*, Heidelberg: Julius Groos Verlag, 1987. 3v.

वर्मा, रामचन्द्र *मानक हिंदी कोश*, प्रयाग: हिंदी साहित्य सम्मेलन, 1991. 5v. (ヴァルマー, ラームチャンドル, 『標準ヒンディー語辞典』, ヒンディー文学協会, プラヤーグ)

#### 2) サンスクリット語、古期インド語派諸言語

Apte, Vaman Shivaram, *Revised and enlarged edition of Prin. V. S. Apte's The practical Sanskrit-English dictionary*, Poona: Prasad Prakashan, 1957-1959. 3v.

Monier-Williams, Monier. A, *Sanskrit-English Dictionary: Etymologically and Philologically Arranged with Special Reference to Cognate Indo-European languages*, revised by E. Leumann, C. Cappeller, et al., Oxford: Clarendon Press, 1899.

Turner, R. L. (Ralph Lilley), Sir. *A Comparative Dictionary of Indo-Aryan Languages*, London: Oxford University Press, 1962-1966. Includes three supplements, published 1969-1985.

#### 3) ペルシヤ語

Steingass, Francis Joseph, *A Comprehensive Persian-English Dictionary, including the Arabic words and phrases to be met with in Persian literature*, London: Routledge & K. Paul, 1892.

#### 4) ドラヴィダ諸語

Burrow, T., and M. B. Emeneau, *A Dravidian Etymological Dictionary*, 2nd ed., Oxford [Oxfordshire]: Clarendon Press, 1984.

## 目次

अ	1	ड	258	न	440
आ	61	च	258	प	483
इ	83	छ	292	फ (फ़)	556
ई	92	ज (ज़)	304	ब	570
उ	93	झ	331	भ	618
ऊ	121	ञ	341	म	635
ऋ	123	ट	341	य	690
ए	124	ठ	351	र	698
ऐ	129	ड (ड़)	357	ल	726
ओ	130	ढ (ढ़)	365	व	755
औ	132	ण	369	श	790
क (क़)	134	त	369	ष	807
ख (ख़)	199	थ	395	स	807
ग (ग़)	219	द	398	ह	888
घ	249	ध	429		





अ

अंक /am̐ka/ [←Skt.m. अङ्क- 'a numerical figure; the lap'] *m.* 1 (0から9までの)数字;番号。(⇒अदद, नंबर, संख्या) □देवनागरी ~ डेव्‌व्‌एनार्-गरी-数字(《いわゆるアラビア数字のもとになったインド数字 (भारतीय अंक) ०, १, २, ३, ४, ५, ६, ७, ८, ९》)。 2 (試験・競技・勝負などの)点数, 得点, ポイント。(⇒नंबर) □उसे गणित में अच्छे ~ मिले। 彼は数学でいい点を取った。 3 (定期刊行物の)号数。(⇒नंबर) □इस पत्रिका के पिछले ~ में उसकी कविता छपी है। 此の雑誌の前号に彼の詩が載った。 4 【演劇】一幕, 一段。(⇒एक्ट) □इस नाटक में तीन ~ हैं। 此の劇は3幕である。 5 मार्क, 印。(⇒चिह्न, निशान) □(पर) ~ लगाना(…に)マークをつける。 6 (幼児を抱いての)せる)腰, 膝。(⇒गोद) □(बच्चे को) ~ देना [भरना, लगाना] (子どもを)膝に抱く。

अंकक /am̐kaka/ [neo.Skt.m. अङ्क-क- 'stamping'] *adj.* 印を押す(人・器具)。  
— *m.* 打印器, スタンプ。

अंकगणित /am̐kaganita/ [←Skt.m. अङ्क-गणित- 'arithmetic'] *m.* 【数学】算数; (計)算術。(⇒अंकविद्या, हिसाब)

अंकटा /āṅkaṭā/ [? <OIA.f. iṣṭakā 'brick': T.01600] *m.* 小石。

अंकड़ा /āṅkaṛā/ [←Skt.m. अङ्क-ड़ा- 'instrument for moving the bolt or bar of a door': T.00108] *m.* 1 フック, 鉤(状のもの)。 2 矢じり。

अंकड़ी /āṅkaṛī/ [←Skt.m. अङ्क-ड़ी- 'hook-shaped'] *f.* 1 (鉤状の)小さな釣り針。 2 矢じり。

अंकड़ीदार /āṅkaṛīdāra/ [←Skt.m. अङ्क-ड़ी- + -दार] *adj.* 鉤状の。

अंकन /am̐kana/ [←Skt.n. अङ्क-न- 'a mark; act of marking'] *m.* 1 刻印すること; (文字・絵などを)彫って刻むこと。 2 描写, 活写。 3 評価すること。(⇒मूल्यांकन)

अंकना /āṅkanā/ [←OIA. aṅkāyati 'marks, brands': T.00104] *vi.* (perf. अंका /ākā/ [←Skt.m. अङ्क-ना-]) 見積もられる。  
— *vt.* (perf. अंका /ākā/ [←Skt.m. अङ्क-ना-]) 見積もる。(⇒आंकना)

अंकनीय /am̐kāniya/ [←Skt.m. अङ्क-नीय- 'worth being written'] *adj.* 書き留めるべき(こと), 記録すべき(こと)。

अंकल /am̐kala/ [←Eng.n. uncle] *m.* おじさん, おじちゃん《特に子どもが父と同年配の男性に親しく呼びかける言葉》。(⇒चाचा)(⇒अंदी) □(को) ~ कहकर पुकारना (人をおじさんと呼ぶ)。

अंकवाना /āṅkavānā/ [←Skt.m. अङ्क-वान-] *caus. of अंकना, आंकना* *vt.* (perf. अंकवाया /āṅkavāyā/ [←Skt.m. अङ्क-वा-]) 見積もらせる; 見積もってもらう。

अंकवार /āṅkavāra/ [←OIA.f. aṅkapāli-, aṅkapālikā- 'embrace': T.00103] *m.* 1 膝。(⇒गोद) 2 胸; (膝の上で抱く)抱擁。

अंकविद्या /am̐kavidyā/ [←Skt.f. अङ्क-विद्या- 'science of numbers, arithmetic'] *f.* 【数学】算数, (計)算術。(⇒अंकगणित, हिसाब)

अंकशायिनी /am̐kaśāyīnī/ [←Skt.f. अङ्क-शायिन्- '(a woman) lying aside'] *adj.* 添い寝する(女)。  
— *f.* 添い寝する女; 妻。

अंकशायी /am̐kaśāyī/ [←Skt.m. अङ्क-शायिन्- '(a person) lying aside'] *adj.* 脇に寝ている(人)。  
— *m.* 脇に寝ている人。

अंक-शास्त्र /am̐kaśāstra/ [←Skt.m. अङ्क-शास्त्र- 'statistics'] *m.* 統計学。(⇒सांख्यिकी)

अंक-शास्त्री /am̐kaśāstrī/ [←Skt.m. अङ्क-शास्त्रिन्- 'statistician'] *m.* 統計学者。(⇒सांख्यिकी)

अंकाई /āṅkai/ [←Skt.m. अङ्क-आई-] *f.* 1 見積もり, 査定; (小作人と地主の間の取り分を決めるための収穫量の)見積もり。 2 見積もりの仕事に対する報酬[費用]。

अंकाना /āṅkānā/ [←Skt.m. अङ्क-आ-] *vt.* (perf. अंकवाया /āṅkavāyā/ [←Skt.m. अङ्क-वा-]) 見積もる。  
— *vi.* (perf. अंका /ākā/ [←Skt.m. अङ्क-ना-]) 見積もられる。

अंकारा /am̐kāra/ [←Skt.m. अङ्क-आ-] *m.* 【地名】アンカラ(トルコ(共和国)(*तुर्की*)の首都)。

अंकित /am̐kita/ [←Skt.m. अङ्क-इत- 'marked'] *adj.* 1 刻印された, 刻まれた, 彫られた; 記された; (線・罫が)引かれた。 □(पर) ~ करना (…に)…を刻印する[記す]。 □ ~ मूल्य 額面価格。 2 (文字で)描写された; (線・絵で)描かれた。 □ ~ करना …を描写する。

अंकड़ा /āṅkaṛā/ [←Skt.m. अङ्क-ड़ा-] *m.* 1 矢じり。

अंकड़ी /āṅkaṛī/ [←Skt.m. अङ्क-ड़ी-] *f.* 1 (鉤状の)小さな釣り針。 2 矢じり。

अंकड़ीदार /āṅkaṛīdāra/ [←Skt.m. अङ्क-ड़ी- + -दार] *adj.* 鉤状の。

अंकुर /am̐kura/ [←Skt.m. अङ्क-र- 'sprout, shoot, blade; swelling'] *m.* 1 【植物】芽, 新芽, 若芽; 発芽。(⇒अंबुआ) □(में) ~ आना [जमना] (…が)発芽する。 □(से) ~ निकलना [फूटना] (…から)芽が出る。 2 【植物】つぼみ。(⇒कली) 3 【医学】(怪我・できものなどの)傷あと, あと; かさぶた。(⇒अंगूर, पपड़ी) 4 子孫。 5 芽生え; ぎざし。

अंकुरण /am̐kuraṇa/ [←Skt.m. अङ्क-रण- 'sprouting, shooting'] *m.* 発芽; 萌芽, 芽生え。 □संदेह का ~ 疑念の芽生え。

अंकुराना /āṅkurānā/ [←Skt.m. अङ्क-र-] *caus. of अंकुरना, आंकुरना* *vt.* (perf. अंकुरवाया /āṅkuravāyā/ [←Skt.m. अङ्क-वा-]) 見積もらせる; 見積もってもらう。

## あ行

アーモンド बादाम<sup>m</sup> bādāmā バーダーム  
 アーンドラ・プラデーシュしゅう【アーンドラ・プラデーシュ州】 आंध्र प्रदेश<sup>m</sup> āndh'ra pradeśā アーンドル プラデーシュ  
 あい【愛】 प्यार<sup>m</sup> pyārā ビヤール, प्रेम<sup>m</sup> premā プレーム  
 あいかわらず【相愛わらず】 वैसे ही vaise hi ワエーセー ヒー, हमेशा की तरह hameśā ki tarahā ハメーシャークー タラ  
 あいきょうのある【愛嬌のある】(明朗快活な) आकर्षक ākarṣakā アーカルシヤク, खुशमिजाज xuśamizājā クシュミザージ (社交的な) मिलनसार milanāsārā ミランサール  
 あいこくしん【愛国心】 देश-भक्ति<sup>f</sup> deśā-bhakti デーシユ・バクティ  
 あいさつ【挨拶】 नमस्कार<sup>m</sup> namaskārā ナマスカール, सलाम<sup>m</sup> salāmā サラーム ◆(人に)挨拶する (को) नमस्कार<sup>m</sup> करना namaskārā karānā ナマスカール カルナー  
 あいじょう【愛情】 प्यार<sup>m</sup> pyārā ビヤール, प्रेम<sup>m</sup> premā プレーム, ममता<sup>f</sup> mamatā マムター  
 あいず【合図】 इशारा<sup>m</sup> isārā イシャーラー, संकेत<sup>m</sup> samketā サンケート  
 アイスクリーム आइसक्रीम<sup>f</sup> āisakrīmā アーイスクリーム, कुलफी<sup>f</sup> qulāfi クルフィー  
 アイスランド आइसलैंड<sup>m</sup> āisalaīmḍā アーイスラエーンド  
 あいする【愛する】 प्यार<sup>m</sup> करना pyārā karānā ビヤール カルナー, प्रेम<sup>m</sup> करना premā karānā プレーム カルナー  
 あいそがつきる【愛想が尽きる】 जी<sup>m</sup> उचटना ji ucaṭānā ジー ウチャटनाー  
 あいそのよい【愛想のよい】 मिलनसार milanāsārā ミランサール, हंसमुख hāsā mukhā ハンスムク  
 あいた【空いた】 खाली xālī カーリー  
 あいだ【間】(時間) अवधि<sup>f</sup> avadhī アオディ (距離) दूरी<sup>f</sup> dūri ドゥーリー (空間) अंतराल<sup>m</sup> amtarālā アンタラール  
 あいて【相手】(仲間) साथी<sup>m</sup> sāthī サーティー (敵) दुश्मन<sup>m</sup> duśmanā ドウシュマン, विपक्षी<sup>m</sup> vipakṣī ヴィバクシー  
 アイディア (考え) खयाल<sup>m</sup> xayālā カヤール, विचार<sup>m</sup> vicārā ヴィチャール (思いつき) सूझ<sup>f</sup> sūjhā スージ  
 あいている【開いている】 खुला khulā クラー  
 あいている【空いている】 खाली xālī カーリー (自由な) खाली xālī カーリー  
 あいま【合間】 बीच<sup>m</sup> bicā ビーチ  
 あいまいな【曖昧な】 अस्पष्ट aspṣṭā アスパシュト, नासाफ nasāfa ナーサーフ, संदिग्ध samdigdhā サンディ

グド  
 アイルランド आयरलैंड<sup>m</sup> āyaraīaimḍā アーヤルラエーンド  
 アイロン इस्तरी<sup>f</sup> istārī イストリー, प्रेस<sup>m</sup> presā プレース  
 あう【会う】 मिलना milnā ミルナー  
 あう【合う】(一致する) मेल<sup>m</sup> खाना melā khānā メール カーナー (合わさる) मिलना milnā ミルナー (適合する) अनुकूल होना anukūlā honā アヌクール ホーナー, काम<sup>m</sup> चलना kāma calānā カーム チャルナー  
 アウトライン रूपरेखा<sup>f</sup> rūparekhā ループレーカー  
 あえぐ【喘ぐ】 हाँफना hāp'hānā ハーンブナー  
 あお【青】 नीला रंग<sup>m</sup> nīlā raṅgā ニーラー ラング  
 あおい【青い】 नीला nīlā ニーラー (顔色などが) पीला pīlā ピーラー  
 あおぐ【扇ぐ】 झलना jhālānā ジャルナー, डुलाना dulanā ドゥラーナー  
 あおじろい【青白い】 पीला pīlā ピーラー, सफेद safedā サフェード  
 あか【赤】 लाल रंग<sup>m</sup> lālā raṅgā ラール ラング  
 あかい【赤い】 लाल lālā ラール  
 あかくなる【赤くなる】 लाल होना lālā honā ラール ホーナー  
 あかじ【赤字】 घाटा<sup>m</sup> ghāṭā ガーター, टोटा<sup>m</sup> toṭā トーター  
 あかちゃん【赤ちゃん】 बेबी<sup>f</sup> bebi ベービー, शिशु<sup>m</sup> śiśu シシユ  
 あかり【明かり】 उजाला<sup>m</sup> ujālā ウジャラー, रोशनी<sup>f</sup> rośanī ローシュニー  
 あがる【上がる】(上の方へ行く) चढ़ना caṭhānā チャラナー (増加する) बढ़ना baṭhānā バルナー (興奮する・緊張する) नर्वस होना narvasā honā ナルワス ホーナー  
 あかるい【明るい】 उज्ज्वल ujjalā ウッジワル, रोशन rośanā ローシャン (性格が) खुशमिजाज xuśamizājā クシュミザージ, जिंदादिल जिंदादिल zimdādīlā ズインダーディル, हंसमुख hāsā mukhā ハンスムク  
 あき【空き】(透き間) दरार<sup>f</sup> darārā ダラール (余地) जगह<sup>f</sup> jagahā ジャガ  
 あき【秋】 पतझड़<sup>m</sup> patāj'haraṅgā パトジャル, शरत्<sup>f</sup> śarat シヤラト  
 あきち【空き地】 खुली जगह<sup>f</sup> khulī jagahā クリー ジャガ  
 あきびん【空きびん】 खाली बोटल<sup>f</sup> xālī botalā カーリー ボータル  
 あきべや【空き部屋】 खाली कमरा<sup>m</sup> xālī kamārā カーリー カムラー  
 あきらかな【明らかな】 ज़ाहिर zāhirā ザーヒル, स्पष्ट spaṣṭā スバシュト  
 あきらかに【明らかに】 बेशक beśakā ベーシャク, स्पष्ट रूप<sup>m</sup> से spaṣṭā rūpa se スバシュト ループ セー  
 あきらめる【諦める】 छोड़ना chōṛānā チョールナー  
 あきる【飽きる】 उकताना ukātānā ウクターナー,